

北畑淳也著 Junya Kihahata

世界の思想書50冊から身近な疑問を
解決する方法を探してみた

Forest
2545
Shinsyo

まえがき 社会からの逸脱を感じたときに

「思想」

この言葉を聞いたときにあなたは何をイメージするでしょうか。ある人は、次から次へと髭もじゃのおじさんを思い浮かべるかもしれません。またある人は、自らのうちに思想を抱くこと自体を、極めて危険なことだと考えるかもしれません。

しかし、「思想」とはこのように日常とは縁遠いものや危険なものではありません。

なぜならば、我々が常日頃当たり前のように考えていることのすべてが、何らかの「思想」の影響下にあるからです。

このことについては、大きく2つの角度から述べることができます。

1つは我々が行動するにあたり判断の拠り所とするものとしてです。たとえば、「お金がたくさん欲しい」「結婚したい」「転職をしたい」など、ありきたりな願望を持つことが

誰にでもあるかと思えます。それらは、空っぽの心の中から錬金術のようにもくもくと湧いてきたものでしょうか。おそらくそうではなく、社会で暮らす中で、それを「良い」とする「思想」があつたからでしょう。

2つ目は、世界における現象理解のために使用するものとしてです。たとえば「資本主義」という言葉があります。この言葉は我々日本人にとってその世界で生きていると自己認識する概念ですが、少なからず過去の誰かの影響を受けています。たとえば本を読んだことがなくても、アダム・スミスやカール・マルクスの影響は避けられません。

それを裏付けるものとして、かれらの思想を読むと、「それほど目新しいことをいっていない」という感覚を覚えます。その理由は、かれらが凡庸だったからではなく、それらを「当たり前のこと」と考えるほどに、かれらの思想が我々の根底にあるからです。このことは「保守」や「リベラル」などの政治思想の領域においても同じことがいえます。

いずれにしても、我々は生まれてから「思想」を紡ぐ行為の繰り返しの中を生きているということなのです。

本書は「思想」というものが、実は極めて身近なものだと感じてもらうことを目的としています。それを「名著」と呼ばれる書物を起点として実証してみようというのが、これ

から行うことです。

取り上げた書籍の中には一見、あなたにとって無関係に思えるものもあるかもしれません。しかし、読み進めていただければ、遠くにあるように見える思想も、むしろ我々の思考をより深いレベルで縛っていることを理解できます。

思想と哲学は何が違うのか？

本書のタイトルは「思想書」と銘打っていますが、おそらく「哲学書とどこが違うの？」という疑問を持つ方がいることでしょう。

もちろん厳密な定義というのはありません。しかし、あるものを「哲学」ではなく「思想」と呼ぶとき、無意識にある1つのことが念頭に浮かぶと私は考えています。

それは「哲学」が物事の根本原理を探求するものだとしたら、「思想」は「現実において具体的にどうなるか」を突き詰めて考えるものだということです。例を挙げるならば、「神はいるのか?」「善とは何か?」といったものを徹底的に探求する内向きの思考が哲学だとしたら、どのように考えて行動すれば理想の人生を歩めるか、理想の社会を築けるか、という外向きの思考が思想ということです。

どちらかというとは私は、「現実においてどう考えるべきか」「どう行動すべきか」を考えるのが好きなので、「思想」という言葉に愛着を持っています。

それゆえに、本書に挙げている書籍の中には一般的には哲学書と呼ばれるものも含まれます。しかし、それらもあくまで「現実においてどうするか」という「思想」の切り口で解説しています。

もちろん、哲学という営みについても、生き方の指針を教えるものもあり、人生や社会の価値判断を考える上で重要なのですが、複雑化した世界や生き方が問われることが顕著な時代にあつては、「思想」のほうがより求められている気がするのです。

哲学書や思想書を読んでも意味はないのか？

哲学書と思想書、いずれにしても読む人は限られます。多くの人が、そんなものを読んだところで、「役に立たない」「意味がない」と考えているからではないでしょうか。

さて、ここで考えていただきたいのは、この「役に立たない」や「意味がない」という言葉が、どのような観点で述べられているのかということ。おそらくは、「金が儲かるかどうか」という功利主義のカテゴリーにおいてではないかと思えます。

確かに、功利主義に依拠した物事の価値判断は、多くの人のコンセンサスを得られる見解でしょうし、非常に深く浸透しています。

しかし、「役に立たない」ものや「目的がない」ものにこそ、我々の人生に「意味」を与えてくれる可能性があることに気づく必要があります。

小説やアニメ、映画といったエンタテインメントを見ることも、歴史を学ぶことも、絵画に触れることも、歌舞伎や浄瑠璃、能といった伝統芸能に触れることも、一般人にとっては何の役にも立たない、金にならない無駄なものか、考えてみてください。そうではないでしょう。「意味」はあります。

もちろん、個人レベルで考えれば、それぞれの分野を深く追究することで、職業として成り立つレベルの専門家になり、稼ぐことができる人もいます。また最近では、ビジネスパーソン向けに歴史や芸術について解説する本もあります。社会的なアッパー層や海外の取引先の要人との雑談で、そうした知識を利用できるといったメリットが記されています。

ただし、繰り返しになりますが、そうしたメリットさえも度外視した行動は意味がないのでしょうか。「明日の仕事で活きる」とか「起業するために役立てよう」と

かだけを考えることが、「正しい生き方」ではないと私は考えます。むしろ、「役に立つ」「稼ぐため」という思考自体が、非常に貧困ではないか、とも感じるので。

役に立たないものを学ぶ贅沢

ソースティン・ヴェブレンの『有閑階級の理論』という名著があります。有閑階級とは「閑が有る」と読んで字のごとく、かつてヨーロッパで生活のために働く必要がない階級を意味しました。

試しに英米文学のいくつかを手に取ってみてください。「お前らいつ働いてんの？」と突っ込みたくなるほど、かれらは働きません。なぜなら、「働いたら負け」だからです。

かれらにとっては、働くことは「多くの財を所有していない」ことを示す行為であり、それは自らの名誉を傷つけるものとされたのです。そして、「どれほど多くの財を所有しているのか」という基準を超えて、いかに無駄なことに大金を投入して自分の名声を高められるかという争いが生まれたそうです。つまり、彼らにとっては、「役立つ」とか「稼ぐ」といった価値観は貧困の象徴なのです。

しかし、そうした価値観は、有閑階級だけの特権ではありません。むしろ、一般人だけ

からこそ、無駄なことにお金だけではなく時間を使うというのは、有閑階級以上に、とんでもなく贅沢な試みとなるのです。

それでもなお、即物的な何かを得られることを期待している人にとっては、贅沢だからといって得られるものがなければ意味がないと思うでしょう。しかし、私はそうした役に立たない贅沢な行為——哲学書や思想書を読むことこそ、何らかの形で人生を豊かにしてくれると考えています。

非常に教条的かつ抽象的に感じるかもしれませんが、しかし、「哲学や思想の知識を得られれば、知的マウンティングで有利に立てる」といったメリットを語るのは、「教養」を矮小化した、あまりにもセコくて貧困な発想だと思うのです。

長くなってしまいました。ここでお伝えしたいのは、哲学書や思想書を役に立つ（稼げる）とか立たない（稼げない）という判断基準で考えるのは、非常にもったいないという事です。

「即効性」を求めることが近道なのか

最近では「読書」というと、何か即効性のあるテクニックを知ることだとするトレンド

があります。

たとえば、「ビジネス書」と呼ばれるものがまさにそれで、「成功者になるには……」「仕事ができる男になるには……」といったような、聞くだけで虫唾むしずが走るような枕詞とともに「スーツは〇〇を着ろ」「飲み会は1次会までにしろ」「出社1時間前にはカフェで朝活をしろ」などと、いい年をした大人が日常のすべてを事細かに指示される本を好むのです。本来は「うるせえな。何でお前に他人の人生のことを事細かに指示されないといけないんだよ」と怒りを持つべきなのに。

そもそも、こういった書籍に出てくるような「成功者」なる人がすすめるテクニクや行動が、あなたの人生に当てはまるのでしょうか。そして百歩譲ってその通りにやれば成功できるとして、その人物とまったく同じ生活をする人生が楽しいのでしょうか。

ここままで大半のビジネスパーソンを敵にしたことは間違いありません。ただし、これはあくまで私の主観ですが、多くの人は自ら固有の（ユニークな）人生を歩めたときに、その人生を良いものだったと考えるはずです。逆に、成功者なる人が歩いてきた道をただ機械のようになぞることが「成功」だとは、私は思いません。

自分の人生を自分らしく生きるためには、自ら思考し、選択し、判断する必要があります。

そのサイクルを上手くこなすためには「思想」が大いに必要なのです。もちろん、「思想」は、自分が「良い」と考えていたことを、時には「悪い」と断言するものでもあり、我々を苦しめることもあります。

しかし、人生全体を俯瞰したときに、より多くの「思想」に触れていたことを後悔することはないでしょう。

本書が提供でしよう

そうはいっても「思想」が書かれた本というのは簡単なものではありません。

たとえば、マルクスの『資本論』なんかは数百ページの本が何冊も連なっており、睡眠薬として使う人もいるほどです。そういった深遠で難解にも思える「思想」のエッセンスを掴み、思想書を「手に取ってもらうきっかけ」をつくるのが、本書で私が試みたことです。具体的には2つの切り口からそれを行います。1つ目は歴史を通して語り継がれる「思想」全般に通底するものを描くこと、2つ目がその「思想」が語ったことを今の時代に置き換えて読んでみることです。

もちろん、本書では「思想」を唱えた方の考えのごく一部しか提示できていないでしょ

うし、もしかすると私が紹介する内容が批判されるべきものである可能性も多々あります。しかし、これをメルカリに出品することになるにせよ、何か1つでもあなたの好奇心を膨らませることができれば、本書の役割は果たせたと私は考えます。

「対話」をすることにより洗練される

蛇足ですがもう1つだけ。

「思想」を身近に感じるためにぜひやっていただきたいことがあります。それは「思想」が書かれた本を読んだあとに、ぜひとも誰かとその内容について議論してみたいのです。

「哲学をする」とか「思想を学ぶ」と聞いて、どこかに籠って1人で考え込むという姿を想像する人がいるかもしれませんが、それはプラトンから続く悪しき伝統です。

その前のソクラテスという哲学者は誰よりも「対話」を通して考えを深めることを良しとしました。

当然といえば当然で、ある思想に現実世界で意味を持たせるのは市井に生きる人々なのです。それ以前に、心が折れそうになるくらい難解な書籍でも、他者との対話を重ね

ると、楽しく読むことができるという点もあります。

私について

「で、お前は誰？」と言われそうなので、少しでも自己紹介をします。

東京大学を卒業後に外資系コンサルティングファームを経て、現在は上場企業の取締役を務めている、という多くの人が期待するような輝かしいプロフィールを、残念ながら私は持ち合わせていません。

あえて1つだけ私を特徴づけるエピソードを伝えるとすれば、小学校でも中学校でも高校でも大学でも社会人になってからも、行く先々で「君は頭がおかしい」と必ずいわれてきた人間だということです。先輩からも後輩からも同級生からもいわれていました。

もちろんこれは、まったくなんの自慢にもならないどころか、黒歴史の積み上げなわけです、今も継続的に積み上げているわけですが、この境遇には幸運な点もありました。

それは「自分が社会から逸脱している」という感覚」を持つことができたがゆえに、「当たり前前」とされていることについて批判的に考える機会が多かったことです。そのときに出会ったのが「思想」です。

多くの思想に触れることで、我々が言語化することすらも放棄している「当たり前」を
探求する習慣ができました。

本書は社会的優等生ではない私が思想書を使って考えたことを僭越せんえつながら書かせていた
だいております。

*

本文の上下に線が引いているある箇所や、へで括っている箇所は引用部です。原則
として、各節の頭に掲載されている書名が引用元です。他の情報から引用した際は、個別
に出典を明記しています。また、可読性を考慮し、引用者の判断で適宜ルビを振っています。

もくじ——世界の思想書50冊から
身近な疑問を解決する方法を探してみた

まえがき 社会からの逸脱を感じたときに 3

第1章

希望持てないわ、ほんま

*社会について

- 01 事実とは何か? 『「知」の欺瞞』 24
- 02 どうしてマスクミは偏った報道ばかりするのか? 『世論』 34
- 03 洗脳される人の共通点は? 『全体主義の起源』 41

- 04 同調圧力とは何か？ 『群衆心理』 48
- 05 多様性の尊重はいかにして可能か？ 『政治的なものについて』 55
- 06 「客観的に」物事を見るにはどうすればいいのか？ 『暗黙知の次元』 64
- 07 人類は本当に進歩しているのか？ 『啓蒙の弁証法』 71

第2章

ある意味、スゴ〜イデスネ!!

*日本人について

- 08 なぜ日本人は「村社会」をつくりたがるのか？ 『日本の思想』 80
- 09 日本人はなぜ「空気」を読むとするのか？ 『「空気」の研究』 88
- 10 なぜ人は差別的な言動をするのか？ 『レイシズム』 96

- II 中国や韓国への差別意識はどこからきたのか？ 『福沢諭吉 朝鮮・中国・台湾論集』
- 12 愛国心とは何か？ 『二十世紀の怪物 帝国主義』 112
- 13 我々はいつから面喰いになったか？ 『美人論』 120

第3章

お前が生き方を決めるな

*価値観について

- 14 「幸せ」とは何なのか？ 『経済成長という呪い』 130
- 15 自由を獲得するにはどうすればいいのか？ 『大転換』 139
- 16 金儲けは悪いことか？ 『市場の倫理 統治の倫理』 146
- 17 結局損得を優先させて生きるのが正しいのか？ 『道德感情論』 153

- 18 危険思想はどのようにして生まれてくるのか？ 『日本イデオロギー論』 160
- 19 我々は何をベースにして善悪の違いを見分けているのか？ 『道徳の系譜学』 167
- 20 なぜ優秀な人でも犯罪に手を染めることがあるのか？ 『服従の心理』 176

第4章

ウソがホントになる世の中で

*政治について

- 21 常識とは何か？ 『フランス革命の省察』 186
- 22 「国家」はどのようにして誕生したのか？ 『原子契約について』 195
- 23 多数決とは何か？ 『民主主義の本質と価値』 203
- 24 民主主義はどうすると失われるのか？ 『いかにして民主主義は失われていくのか』 210
- 25 グローバル化が進んだ先の世界はどういうものなのか？ 『帝国以後』 216

26 なぜ西欧は世界を支配することができたのか？ 『リオリエント』 225

27 いつの時代も格差はなぜ拡大するのか？ 『史的システムとしての資本主義』 234

第5章

稼ぐ力も生産性もなかったら…

*仕事について

28 イノベーションとは何か？ 『なぜ日本企業は強みを捨てるのか』 242

29 なぜ仕事はつらいのか？ 『自由と社会的抑圧』 250

30 人材の流動性を上げれば世の中は良くなるのか？ 『不安な経済／漂流する個人』 259

31 どうしたら「稼ぐ力」を身につけられるのか？ 『最後の資本主義』 268

32 成功者になる条件とは何か？ 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 276

33 どうしたら生産性が上がるのか？ 『孤独なボウリング』 284

34 無能なリーダーが誕生するのはなぜか？ 『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』 291

35 良きリーダーになるためにはどうすればいいのか？ 『デイスコルシ』 298

36 なぜメンタルをやられるのか？ 『管理される心』 305

第6章

簡単に啓発される

我々の「自己」って…

*自分磨きについて

37 アドラー心理学はなぜ流行るのか？ 『推測と反駁』 312

38 いかによれば、感情を上手にコントロールできるか？ 『エチカ』 321

- 39 本を月に100冊読めば、成長できるのか？ 『読書について』 327
- 40 思考力を身につけるにはどうすればいいのか？ 『社会学的想像力』 335
- 41 頭のいい人とはどういう人のことをいうのか？ 『知識人とは何か』 341
- 42 哲学にはどういう意味があるのか？ 『哲学入門』 349

第7章

いつも憂鬱の種は尽きまじ

*悩みについて

- 43 孤独を感じる場合、どうすればいいのか？ 『アメリカのデモクラシー』 358
- 44 なぜSNSでは孤独感を埋められないのか？ 『コミュニティ』 367
- 45 本当の友人とは、どういう人のことをいうのか？ 『友情について』 377

- 46 やりたいことが見つからない場合、どうすればいいのか？ 『純粹理性批判』 383
- 47 我々はなぜ存在しているのか？ 『実存主義とは何か』 392
- 48 我々が憂鬱になる理由とは何か？ 『大衆の反逆』 398
- 49 絶望とは何か？ 『死に至る病』 407
- 50 なぜ死にたくなるのか？ 『自殺論』 416

あとがき 思考しない人生に意味はない 425

装丁 河村誠
協力 水谷忠央
本文デザイン・DTP フォレスト出版編集部

第1章

希望持てないわ、ほんま
*社会について

281_Anti nuke

WE
ARE
NOT
PEACE



title: OI

事実とは何か？

アララン・ソーカル、ジャン・プリクモン著、田崎晴明、大野克嗣、堀茂樹訳
『「知」の欺瞞：ポストモダン思想における科学の濫用』岩波現代文庫、2012年



「事実に基づいた説明を」

公の場で説明責任を果たしたり、相手を説得したりする状況で求められる言葉です。「事実が大事だ」と聞いて、反対する人はいないように、個人が社会で生きていく上では必須の心構えといってもいいでしょう。しかし、驚くべきことに今の社会ではこの「事実」というものが軽んじられるようになっていきます。

「ポスト・トゥルース」という言葉をご存じでしょうか。これは、実際何をするかよりもいかにして感情を湧き上げらせ支持を取り付けられるかということを重視する昨今の政治状況を表現する言葉です。

そうなった背景を断定することは難しいですが、1つには「盛り上がること」が「正しいこと」だとされる風潮があるのかもしれない。

「反日」という言葉が、例としてふさわしいかもしれません。

ある言説についてのファクトチェックを関心の^{うちが}埒外に置き、単に日本を持ち上げているものか、批判しているものかで脊髄反射します。そして後者の場合は、「国益を損なう反日」という文脈で総攻撃を仕掛けることがあります。あるいは、奇怪な思考回路を用いて、アクロバティックな擁護や、陰謀論を展開することで、その言説の主旨を歪ませ、ファクトを貶めたりします。

当然のことながら、これまでの歴史や国際社会における日本の行動が常に正しく、それに対する批判のすべて間違っているわけがありません。ところが、この「反日」を使う多くの人は、そういった議論の土台を最初から放棄しているように見えます。かれらの中では、あくまで「日本（現政権）を持ち上げているか」「批判しているか」だけが論点なのです。そして、このようなことを書いている日本人である私にもまた、「反日」というレッテルが貼られるかもしれないかもしれません。私はただ、誇りある日本人であるために、恥ずべき態度はしたくないと考えているだけなのです。

こういった「事実」が軽視されつつある社会状況を踏まえ、改めて「事実」という言葉について考えを深められる本があります。アラン・ソーカルとジャン・ブリクモンの『「知」の欺瞞』です。

この著者の1人であるソーカルは、「ソーカル事件」というものを起こした人物として有名です。この事件は、ソーカルが難解なカタカナ語や数式をちりばめるだけで権威を持たせようとするアカデミアへの批判の意味を込めて、カタカナ語や数式をはめ込んだ無内容な論文を専門誌に送ったら、本当にそのまま権威ある雑誌に掲載されたことに端を発する事件です。

この行為自体は批判の対象ともなるのですが、ソーカル自身がそこまでして証明したかったことは「事実とは何か」という問題提起だったとされます。

本書の中では、科学者である著者が「事実」という言葉に揺らぎが生じる理由を述べています。

「事実」が揺らいでいる背景

まず、「事実」という言葉の定義を明確化できない理由を見ていきます。この背景には

2つの思想が極端に推し進められているのです。それは、懐疑主義と相対主義です。

まず、1つ目の懐疑主義のほうから見ていきましょう。こちらはデカルトやヒュームといった近代哲学の初期段階に登場した思想的態度です。基本的には〈たしかに何らかの外
界が存在する。しかし、その世界についての信頼できる知識を獲得するのは不可能だ〉と
いう立場をとります。

徹底的に「正しい」とされることに対して、それが本当にそうなのかを疑って考え抜く
のです。

この思想の強さは、このアプローチをとってくる人を〈論駁ろんぱくすることはできない〉点に
あります。つまり、「そういわれればそうかも」と誰に対しても思わせることができるのです。
たとえば、「この椅子はどのような構造なのか？ 原子の集まりならば、それらはどの
ような構造か？ それが素粒子の集まりならそれはどのような構造か？」といった無限連
鎖に陥ることをイメージしてもらおうと、この話は理解しやすいでしょう。こういう懐疑の
連鎖に放り込まれると「椅子とは○○だ」という一定の考えを持つ人も途方に暮れざるを
えません。

しかし、この無敵に見える懐疑主義者にも致命的な弱点があります。それは日常生活で

〈首尾一貫して懐疑主義を貫き通すのは不可能だ〉というものです。つまり、学術的分野では徹底的にあらゆることを疑うとっておきながら、日常生活ではその態度を適用しないというダブルスタンダードが常態化するのです。

懐疑主義を日常生活で貫こうとすると、たとえばキーボードの「A」を押すたびに「これはAが常に出てくるとは限らないのではないか？」と疑い続けなければなりません。そんな人が職場にいたら仕事が進みませんし、周囲はドン引きでしょう。

次に、2つ目の相対主義です。

相対主義とは〈ある命題が真であるか偽であるかは、個人や社会集団に依存して決まるとする哲学すべてのこと〉を指します。

つまり、相対主義は、真偽が絶対的に決められるのではなく、個人や社会を勘案して真偽のボーダーラインが変化するのです。だから、この立場をとる人は事実を追求する者に、〈時間を浪費しているのであり、(中略)原理的に幻想にすぎないと説く〉ことを基本とします。絶対的真理を想定しないということです。言い換えれば、〈本当に合理的であるといえるという考えに意味があると認めない〉のです。

この立場は、固有の立場をとらないことで自らの「客観性」を保証することに強みがあ

ります。

しかし、こちらの立場も非常に弱い部分があります。たとえば、〈飛行機に乗ったこと
があり、人工衛星からの写真を見たことがある人にとって、地球が（近似的には）球形を
していると信じていることが「本当に合理的」だとはいえないのか?〉と問われると困ること
になるのです。

「事実」とは何か

ここまで近代以降の主流とされる2つの立場を見てきました。いずれの立場も方向性に
違いはあるものの、「事実」が何かを決めることから避けている点で共通しています。し
かし、著者の立場はあくまで「事実」とは何なのかを定義しようと考えています。

多くの人は「事実」の定義について、〈感覚以外に何ものかが存在している〉ことを期
待しているかもしれません。ここでいう「感覚」というのは人間が外界や物事を把握する
行為を指します。

しかし、著者はこのような「事実」という言葉への理解に〈感覚以外の何ものかが存在
するというのは、もっともらしい仮説に過ぎない〉と批判的な立場をとります。ということ

とは、あるものが「事実」だと認識するには最終的には感覚に頼るしかないということです。ただし、このことは「俺が思うからそれは事実だ」といったようなジャイアン論法を意図するものではありません。

著者は「事実」というものについて次のように述べています。

科学の理論の実験的検証の総体こそが、われわれが自然界についての（中略）客観的な知識を獲得したことの証拠なのである。

ここで述べられているのは、「これは事実だ」と確信するのはあくまで我々の感覚にはよるものの、それは独善的なものであってはならず、実験的検証により極めて再現性高く（演繹的に）、我々の前に現出することが求められるということです。

したがって、たとえば「射手座の人は明日気になる人に告白される」ということを占星術師が伝えてきて、仮にあなたが気になる人から告白されたとしても、占星術が科学的な学問だということにはならないわけです（あなた自身にとって起きたこと自体は「事実」でしょうけども）。仮にそれを厳密な意味での「事実」というためには、「射手座」の人を数万人

は連れてきて、相当数の人から「俺、昨日告られたわ」という言質とその人が付き合うことになった交際相手を確認する必要があるのです。

ポスト・トゥルースが叫ばれる時代で

改めてですが、昨今は「ポスト・トゥルース」という言葉が叫ばれ「事実」が軽んじられていきます。もはや「事実」かどうかがそれほど問題ではなくなる時代が来ているのです。このことは言葉にしてみると恐ろしいものですが、現実においてそうなっているからこそ「ポスト・トゥルース」という言葉が全世界で流行しているわけです。

では、なぜ「事実」が軽んじられるようになったのでしょうか。1つにはここでも取り上げたような懐疑主義や相対主義などが我々の思考の大部分を占めはじめているからなのかもしれません。実際、絶対的に正しい真理や確実な証明などはないという思考が人気を博そうとしているのです。

日本人の中にも、さんざん「思想」について語っておきながら、現実において起きている具体的な問題に真正面から答えようとせず、「どっちもどっち論」を展開するのを生業とする「有識者」が散見されます。そういった人間を支持する人がいるからこそ成り立つ

ている芸だを考えると、ある種そこに「安全地帯」を多くの人が見いだしているのかもしれない。しかし、この著書を読む中で私が思うのは、「事実」が軽んじられている背景の1つには、あることを「事実」だというためにかかる労力に耐えられなくなっているのではないかというものです。

このことは著書の中の犯罪捜査の例を見ていくとよいかもしれません。犯罪捜査においては、ある人物を「犯人だ」と断定するには複数の情報の積み上げを必要とします。今日においては、たとえば、DNA鑑定の結果、証拠資料、本人や目撃者の証拠、指紋等々を積み上げて容疑者を逮捕します。いくら懐疑論者といえども、強盗犯がカメラに映っていて指紋も現場から採取されている中で、「いや、それでも犯人とはいえないかもしれない」などとはいっていられないでしょう。そういう人がいたら「バカか君は」といわれて終わりです。

しかし、今でこそそのようなことをいえば「おバカさん」とそしられますが、このような個々の「事実」の収集スタイルを「事実」とするには長い道がありました。たとえば、DNA鑑定を「事実」として受け入れてもらうには、「過去の経験の詳細な分析」を必要としたのです。

まとめると、現代社会はそういった緻密な手続きを待ってられない世の中なのかもしれません。それゆえに、「事実」よりも他の何かを優先することを当然のものとする世論ができています。

ただし、この「事実」取得に向けた飽くなき探求が過小評価される世の中は、長い目で見ればあまりいい傾向とはいえないのではないでしょうか。「事実」だと思うものに裏切られたからといって「事実」を追い求めることを軽んじてはならないのです。